

Topic110 メルマリニューアル！

こんにちは、村上です。

ブラウンフィールドの、主にアメリカにおける動向を伝えることから始まった当メルマ。2008年6月からはグリーンビルを新テーマに再出発しました。今回、2010年10月からの再々出発のテーマは“まちづくり”、“都市計画”です。

なぜ“まちづくり”、“都市計画”なのか？理由は多々あるのですが、都市を支える土地(土壌)、都市を構成する要素の一つである建物。それぞれの問題に個別に対応しても解決しないことが多いと感じていたことが一つの理由です。だからと言って、“都市”レベルだと解決できる、と考えているわけではありませんが・・・木ばかり見てきたので、こらでちょっと森全体を眺めてみよう、ということです。木だけを見ることに限界を感じたとも言えます。

メルマの第一のテーマであったブラウンフィールドの解決策として捉えることで、第二のテーマであるグリーンビルの勉強を始めました。しかし今後は、これからの社会が求める都市、低炭素社会やコンパクトシティといった流れの中におけるブラウンフィールドやグリーンビルといった視点で知識を深めていきたいと思っています。

ということで、“まちづくり”、“都市計画”をテーマにメルマを再開いたします。担当者も見た目も変わらない、テーマを発展的に新しくしただけの地味なりニューアルですが、今後ともよろしく願います。

1. 「全国まちづくり会議 2010 in 熊本」

今年の6月から、「(NPO) 日本都市計画家協会 (Japan Society of Urban and Regional Planners: JSURP)」の会員となりました。訳もわからないままに、定期的で開催される研究会でグリーンビルなどについて発表してきましたが、先日(2010年10月10日)は、JSURP主催の「全国まちづくり会議 2010 in 熊本」で“環境と不動産とのかかわり”について発表する機会を得ました。

発表した分科会のテーマは、“既成市街地再開発”でした。そこで、有効な土地利用を阻害する要因としての土壌汚染とブラウンフィールド、英国政府のブラウンフィールド方針とそれに基づいた既成市街地再開が BREEAM(英国の建物環境性能評価システム)を取り入れた事例、などをメインに80分ほどかけて説明しました。その後50分ほど議論が続きました。

出席者は、自治体の住宅局や都市整備の担当、大学で防災を研究されている方、建築学科の学生など、都市工学や建築の専門家であるけれど、ブラウンフィールドやグリーンビルについて深い知識を有している訳ではない方ばかりでした。それが幸いし、ある意味とても基本的なことを改めて考え直すきっかけとなりました。

2. キーワードは、都市の持続可能性？

「都市の持続可能性」という視点から、建物に求められる性能についての議論が活発になされました。永く持続する建物に必要な性能は、日本ではまずは耐震性能であろう、という意見が一番にありました。持続可能な建物であるためには、まずは地震に強くなくてはならない。乱暴な言い方をすれば、省エネ性能が優れていても、地震で倒壊して存続不可能になった上に、地域に迷惑をかけるような建物では意味がない(注:発言者はこんな言い方されていません)ということです。

これに対して、次のような感想を持ち、

- ① 環境配慮不動産とは一般的な建物の有する性能 + α (環境に限らない)な性能を備えた建物である、とは日本では認識されていない。
- ② つまり、“環境”という言葉は、日本では省エネや二酸化炭素排出量削減といった項目に特化したきらいがあり、グリーンビルやサステナブルビルが本来目指す、“持続可能性”の概念が忘れ去られている。

これに対する補足説明、さらなる反論、反論に対する感想などを、ごく簡単にまとめると、

- ① 建物の環境性能評価ツールには、耐用性や信頼性を評価する項目があることを説明。しかし、最終的な評価において、地震に対する具体的な性能がわからなくなることは好ましくない、とさらに反論される。総合的な評価を行うツールの弱点を痛感。省エネや二酸化炭素排出量に対しても、これと同じような意見を何度も聞いてきた。
また、これから建てられる建物はさして問題ではなく、既存の耐震性能の劣る建物への対応が重要だとの意見も。全く同じ問題が、環境性能に関してもある。つまり、既存建物の適切なグレードアップは共通する課題。分野横断的になんとか対応できないものか。
- ② イギリスの評価システム(BREEAM)は、洪水に対する脆弱性やセキュリティを評価項目に盛り込んでおり、持続可能性という見方が強く現れている。“持続可能性”をどれだけ深く吟味しているかの違いだ、と感じる。

「都市の持続可能性」といいつつ、“持続可能性”という概念はきちんと理解されているのだろうか、という素朴な疑問も生じました。“持続可能性”は、“生物多様性”と同様、なんとなく分かった気になっている概念かもしれません。“生物多様性”に適したやまと言葉が定着せずに、堅苦しい5文字熟語で呼ばれている限り、日本人は“生物多様性”の本質を理解できない、というようなことを養老孟司氏がどこかで書いていたのを思い出しました。

とはいえ、都市の持続可能性、DCP (District Continuity Plan) や BCP (Business Continuity Plan)は今後検討を深めるべき課題であり、建物は重要な構成要素の一つです。今後は、“持続可能性”の概念の理解も含め、都市の中で求められる建物の役割などを考えていきます。

(村上の独り言)

恒例となりつつある、長野県のとある村でのファームサポート。今年は初めて、実りの秋真っ盛りの村にお邪魔しました。ご存知のように、この秋はキノコ類が大豊作。お陰で、売り物にはならないけれどというマツタケを、もう結構ですというほどいただくことができました。

マツタケだけでなく、ご主人が山で採ってきた様々な種類のキノコの料理、おばあさんが山で採ってきた栗の渋皮煮など、次から次へと“山で採ってきた”食材が調理されて食卓に並びます。こんなおいしいものが山で手に入るなんて、しかも無料で・・・と、採取と調理の手間+山の手入れの手間のことはひとまず忘れ、豊かな自然をうらやましく感じました。

なお、今年は毒キノコも大豊作で、被害も多発しています。そのためか、長野県版NHKのニュースには「毒キノコローメモ」コーナーがあります。食用キノコと姿の似た毒キノコとの違いを、映像で特徴を示しながら説明していました。とても分かりやすかったけれど、これだけで素人が見分けられるものではないと感じました(NHKがそこまで目指していないことは、コーナー名から明白ですが)。

案の定、こういう“見分け方”は代々親から子に受け継がれる知識だと、キノコが実る山を所有しているけれど、おじいさんから“キノコ情報”を受け継がなかったため怖くてキノコを採ることができない地元の方、がおっしゃっていました。ちなみに、私はたらふくキノコをご馳走になりながらも元気一杯で帰ってきました。私がお邪魔するお宅では、きちんと知識が伝承されているようです。

バックナンバーはこちらからどうぞ！

「ERS Sustainable Site」: <http://www.brown-green.com/>

未来が変わる。
日本が変わる。
チャレンジ
25
イー・アール・エスはチャレンジ25キャンペーンに参加しています。